



TITLE:

京大広報 No. 355

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 355. 京大広報 1988, 355: 503-512

ISSUE DATE:

1988-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209324>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 355

京都大学広報委員会



創立記念式典

—関連記事本文 504 ページ—

目 次

創立記念式典の挙行……………	504
医療技術短期大学部主事の交替……………	504
中国政府派遣大学院留学生 のための予備教育への協力……………	504
5月30日、6月23日及び7月1日の事態……………	505
アスベスト対策に関する報告……………	505
電話番号の変更……………	507
<紹介>	
結核胸部疾患研究所の 改称、改組……………	508

<保健コーナー>	
夏と皮膚科疾患……………	509
体育館附設プールの夏季利用……………	511
白馬山の家 <small>の</small> 夏季開設……………	511
<資料>	
昭和63年度実施の建物等……………	511
計 報……………	511
<随想>	
私の中国旅行—北京・済南・西安を訪ねて 名誉教授 上久保 正……………	512

＜大学の動き＞

創立記念式典の挙行

6月18日（土）本学創立91周年記念式典が、名誉教授、部局長ら関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式典は午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表の答辞があり、本学の発展を祈念して、松田長三郎名誉教授の発声により万歳三唱が行われ、午前11時終了した。

本年の勤続30年表彰者は36名、勤続20年表彰者は145名、計181名である（被表彰者氏名は6月24日の学報第4263号に掲載されている）。

総長は式辞の中で、これら永年勤続者の労をねぎらうとともに、創立以来91年の歩みの中で培われた独自の学風に新しい内発的なエネルギーを注

入し、その基盤を強固にし発展させることの重要性等について述べ、併せてこの一年間に整備・充実された研究・教育体制の概要と今後の推進する課題等について報告された。

引き続き11時30分から京大会館2階会議室で名誉教授懇談会が、また正午から同会館1階講演室及びラウンジで永年勤続被表彰者祝賀会がそれぞれ開催された。

医療技術短期大学部主事の交替

小西 昭医療技術短期大学部主事の任期満了に伴い、その後任として齋明寺 央さいみょうじ ひろし医療技術短期大学部教授（看護学科）が7月1日任命された。任期は昭和65年6月30日までである。

中国政府派遣大学院留学生
のための予備教育への協力

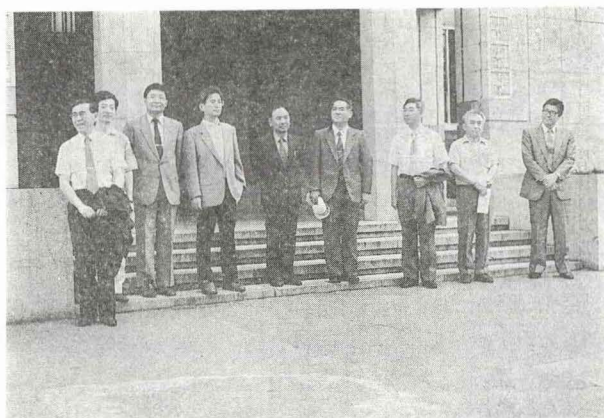
中国政府は、日本に派遣する大学院留学生に対し、来日前に日本語による基礎的専門教育及び必要な言語教育等の予備教育を実施している。この予備教育については、文部省を通じて本学に協力依頼があり、下記のように教養部教官を主に専門教育を担当する教官が、毎年、大連外国語学院派遣留学生養成訓練部に派遣されている。

本年（第7回）も教養部木方 洋教授を派遣団長とする8名の教官が、6月28日から9月15日まで派遣されることとなり、6月24日（金）学生部会議室で、総長をはじめ関係教職員が出席して、壮行会が行われた。

なお、現在本学に在学する中国人留学生数は258名（うち大学院留学生167名）に達し、各国留学生のうちで、最多数である。

昭和63年度派遣教官（8名）

木方 洋	教養部教授（物理学）	団 長
武内 章	〃（数 学）	副団長
児嶋真平	〃（化 学）	
安浦寛人	工学部助教授（電子工学）	
西田豊明	〃（情報工学）	
吉田 忠	教養部助教授（経 済 学）	
相良直彦	〃（生 物 学）	
青木伸好	〃（人文地理）	
（学生部）		



出発前の派遣教官

5月30日、6月23日及び7月1日の事態

5月30日（月）午前10時頃、教養部構内において、ヘルメット着用の二つの集団間で抗争があり、その際、怪我人があったとして、同11時から午後0時50分までの間、京都府警が構内に立入り現場検証を行った。これに関連して、同日午後8時から9時27分までの間、傷害及び暴力行為等処罰に関する法律違反の容疑で、教養部尚賢館及びE号館308号室について、京都府警による捜索が本学関係者立会いのもとに行われ、角材、ビラ等が押収された。

また、6月23日（木）午前8時20分頃、教養部構内において、ヘルメット着用の二つの集団間で乱闘が発生し、怪我人が出た。これに関連して、同日午前8時40分頃、京都府警が教養部構内に立入り、本学関係者立会いのもとに関係箇所の現場検証を行い、午後1時に退去した。

この事態に対し、学生部長及び教養部長は、次の文書を学内に掲示した。

6月23日に教養部構内において対立する集団間の乱闘により怪我人が出るという事態が発生した。

およそ大学の構内においてこのような不祥事

が生じることは、到底容認しうるところではない。

このような事態が今後発生することのないよう、ここに厳重な警告を発するものである。

昭和63年6月23日

さらに、7月1日（金）午後0時45分頃、教養部構内において、再び同様の事態が発生し、怪我人が出た。これに関連して、同日午後1時頃、京都府警が教養部構内に立入り、本学関係者立会いのもとに教養部E号館前で現場検証を行い、午後2時25分に退去した。

重なる事態に対し、学生部長及び教養部長は、次の文書を学内に掲示した。

7月1日に教養部構内において対立する集団間の乱闘により怪我人が出るという事態が発生した。

去る6月23日に同様の事態が発生した際、およそ大学の構内においてこのような不祥事が生じることは、到底容認しうるところではない旨、厳重に警告したところである。

然るに、このような事態が再度発生したことに大学人として深い憤りを感じざるを得ない。

今後この種の事態が発生しないよう、重ねて厳重な警告を発するものである。

昭和63年7月1日

アスベスト対策に関する報告

環境保全委員会及び安全委員会より、このたびアスベスト対策に関する報告を受けましたので、ここに報告の全文を掲載します。

昭和63年6月28日

総長 西島 安則

アスベスト緊急対策に関する 報告について

環境保全委員会
安全委員会

1. アスベスト問題の経緯

珪酸塩鉱物であるアスベスト（石綿）はその繊維性構造と耐熱性、耐火性、耐腐食性などの特性から、建築材料をはじめ多くの用途で使用されてきた。本学においても昭和50年前後までに建設された施設の中には天井、壁などにアスベスト吹き付けが行われている。一方、アスベストの人体影響については、昭和初期からアスベスト肺が確認され始め、昭和30年代にさらに肺がん、悪性中皮腫もアスベスト暴露により生じる疾患として認知されるに至った。これらの疾患が明らかになってきたことから、我が国でも昭和47年より「労働安全衛生法」「同法施行令」「特定化学物質等障害予防規則（特化則）」等において労働環境におけるアスベスト規制がなされ、アスベスト吹き付け作業

の事実上の禁止、石綿粉じんの管理濃度等が定められている。これに対し、一般環境中におけるアスベスト規制に対しては我が国では対応されていない。米国では環境保護庁（EPA）等が中心となり教育施設におけるアスベストに対し、種々の対策が講じられつつある。京都大学においても、昭和62年10月より本学環境保全委員会、安全委員会において、京都大学におけるアスベスト対策の必要性について検討を開始した。その結果、アスベストの非職業的暴露に関しては未だ定まった説はないものの、本学の教職員・学生等の健康面への最大限の配慮、良好な教育研究環境の確保という視点からアスベスト対策を検討する必要があるという結論に達した。今回は昭和63年3月までにとられたアスベスト緊急対策について報告するものである。

2. アスベスト問題協議会の設置

昭和62年10月9日の第49回環境保全委員会並びに昭和62年10月21日の第84回安全委員会の審議の結果、アスベスト問題協議会の設置が決定された。本協議会の委員には本問題が医学、環境科学、建築学等多方面からの検討が必要なことから、糸川嘉則医学部教授、高月 紘環境保全センター教授などの環境保全委員会、安全委員会よりの選任委員に加えて、専門的立場からの委員も含めることとした。

昭和62年10月30日に第1回アスベスト問題協議会を開催した後、本年4月9日まで、計8回の協議会が開催され、当面の緊急対策が必要とされる諸点について検討がなされてきた。協議会においては、まずアスベスト対策の必要性に関して討議が行われ、アスベストの非職業的暴露については種々論議のあるところであるが、その発がん性、悪性中皮腫の発生等には低濃度でも注意が必要であるとする学説もあり、教職員・学生等への健康面、教育研究機関としてより快適環境を求める必要性、いたずらな不安感への最大限の配慮、などの理由から本学におけるアスベスト対策の必要性が確認された。そこで、室内環境として最も暴露機会が多いと考えられるアスベスト吹き付けに關して、職員、学生が常時使用している建物のうち、アスベスト吹き付けが壁、天井等に露出して

いる部屋に対して行われた調査結果をもとに検討を開始した。そのうち、吹き付けアスベストが剝離・剝落状態になっており、緊急対策が必要であると判断されたものが西部学生食堂、教養部A号館講義室に、約2000㎡存在することが分かった。吹き付けアスベスト以外のものについても対策が必要であるが、当面は吹き付けアスベストに関する緊急対策を優先させるべきであると判断した。

3. アスベスト緊急対策に関する報告

(1) 西部学生食堂、教養部講義室に対する緊急対策工事の概要

西部学生食堂、教養部講義室に対するアスベスト緊急対策としては、まず当該教室等におけるアスベストの剝離・剝落の状況を判断し、各教室等の閉鎖措置がとられた。一般に吹き付けアスベスト対策工法としては、1)撤去、2)封じ込め、3)囲い込み、の3工法が知られている。当該教室閉鎖後の緊急対策として、これら3工法の検討を行った結果、剝離・剝落が顕著であることを考慮して、今回の緊急対策工法としては撤去法を選択した。具体的な工事施工方法の検討がアスベスト問題協議会により行われ、とくに吹き付けアスベスト撤去工事に関しては初めての経験でもあることから、アスベスト撤去に関わる特記仕様を策定し、対策工事に取り掛かることとした。アスベスト撤去に関わる特記仕様の内容は日本石綿製品工業会編「吹付け石綿の対応について」を参考にし、除去工事に従事する作業者の資格指定（じん肺及び特化則健康診断の事前実施）、呼吸用保護具・保護服の着用、作業所の隔離（前室の設置、ビニールシートによる隔離、集塵換気装置による換気等）などにつき、とくに慎重な配慮をした。また、吹き付け石綿の廃棄物に関しては適切な処分方法を確立するまでは安全面より、セメントで固化し、ビニールシート密封の上、学内に保管するものとした。さらに本工事施工に伴い、環境中アスベスト濃度測定を実施し、適正な施工管理を行うこととした。撤去工事期間は昭和62年12月29日より昭和63年3月31日であった。

(2) 緊急対策工事に関わる環境評価

緊急対策工事が教育研究環境の改善に効果があることは言うまでもないが、本工事が新たなアス

ベスト飛散をもたらす発生源とならないよう十分な配慮が必要である。このため撤去工事仕様として最大限の留意をはかりつつ、かつ環境測定を実施しつつ、撤去工事を進めることとした。アスベスト濃度測定方法は種々の検討の結果、現段階では結果の相互比較等を考慮し、環境庁のモニタリング方法^注に準じることとした。環境測定結果の概要は次のとおりである。室内環境濃度は撤去前では0.6~21 (f/l)、撤去後0.1~1.3 (f/l)、室外周辺一般環境濃度は撤去前、後、撤去中、いずれも0.2~1.2 (f/l) の範囲内にあった。また、京都大学周辺の一般環境も参考のため数箇所を測定を行ったが、いずれも0.3~1.2 (f/l) 程度であった。この結果をアスベスト問題協議会において詳細に検討した結果、本緊急対策工事に関わる環境評価について、以下のような結論を得た。

- 1) 今回、対象となったアスベストが存在する室内においては、撤去前の室内濃度は部屋を閉鎖した状態では一般外気中濃度とほとんど差はないものの、室内空気の流動状態下では一般外気よりも若干高い濃度となる場合も見られた。
- 2) 撤去中における周辺一般外気中濃度は学内の他の一般環境濃度と比較して、有意な差は見られなかった。
- 3) 撤去工事終了後の室内環境濃度は、撤去前

の人的活動状態下の室内濃度に比較すれば低下し、一般環境濃度に比較すれば有意な差は見られない濃度レベルとなった。

(3) 今後のアスベスト対策について

今後のアスベスト対策としては、世界的な標準対策を参考にしつつ、長期的展望にたった対策指針の策定を行い、効果的な対策を実施することが肝要である。これらの指針策定に並行して、再度学内のアスベスト吹き付け箇所の状況等の詳細な把握が必要である。これらのアスベスト対策を遂行するのはきわめて重要な検討課題であり、今後とも教職員・学生の健康面、不安感を第一に配慮して、本問題に対する対策を慎重に、かつ多面的な配慮のもとに進めていく所存である。

注) 環境庁では「アスベスト発生源対策検討会」において、アスベストの排出実態、一般環境濃度の実態等を把握してきており、昭和60年度より環境濃度の長期的モニタリングを開始している。一般環境中のアスベスト濃度を測定する方法の1つがメンブランフィルター捕集・位相差顕微鏡法であり、5 μ m以上の長さで、長さとの比が3:1以上のアスベスト繊維を検出するものである。今回、(f/l)として示した単位は1l中に存在する繊維数(f)を表している。

電 話 番 号 の 変 更

KUINS 計画の一環として、昭和63年8月29日(月)午前8時30分から、本学吉田地区(病院地区を除く)のデジタル交換機の運用が開始されます。

これに伴い、ダイヤルインサービス(ダイヤルイン登録のあった電話機のみ)が利用可能となり、学外からの着信通話は、交換手を経由せず[075] 753-××××(下4桁は、現在使用の内線番号)で直接受けることができます。学外への発信は、サービスクラス(通話できる範囲)に応じた地域への通話が可能となります。

また、代表番号はなくなり、受付台番号[075]

753-7531となります。取扱い時間は、平日午前8時30分から午後5時まで、土曜日は午前8時30分から午後0時30分です。

次の各地区間の通話は、その地区の専用線番号と従来の内線番号をダイヤルすれば通話できます。

○宇治地区及び病院地区から吉田地区へ

16-××××

○吉田地区及び病院地区から宇治地区へ

17-××××

○吉田地区及び宇治地区から病院地区へ

19-××××

その他使用方法等の詳細については、後日配布する新構内電話番号表をご参照ください。

なお、切替工事のため昭和63年8月27日(土)

午後2時から8月29日（月）午前8時30分までの間、学内電話（直通電話を除く）が使用不能とな

りますので、ご協力をお願いします。

（施設部）

＜紹 介＞

結核胸部疾患研究所の 改称、改組

本年4月より、京都大学結核胸部疾患研究所が京都大学胸部疾患研究所に改称されるとともに、従来7研究部門で構成されていた研究所が4大研究部門（12分野）に改組された。この改称、改組は、時代の変遷に伴う研究内容の進展と社会の要求に対応して実施されたものである。

本研究所の前身は、昭和16年に創設された京都帝国大学結核研究所であり、昭和42年に京都大学結核胸部疾患研究所と改称され、今日に至った。この間、結核症の研究に始まって次第に胸部疾患全体の研究に及ぶ一貫した研究の流れの中で、多くの優れた研究業績を発表し、人材を育成し、国内はもとより関連国際学会にも貢献してきた。

本研究所は、現在呼吸器を中心に、肺、心、縦隔、胸廓などの臓器・組織に発生する疾患の病因や病態について研究を行うとともに、これらの疾

患に対する新しい診断技術や治療法についても研究を行っている。とくに肺は生命を維持するために不可欠の臓器であり、一度損傷を受けると組織のもと通りの再生・修復が期待し難い特殊な臓器である。この意味で肺疾患の研究は、生命維持や老化の予防にあたっては、心臓や脳の疾患とともに重要な研究と思われる。

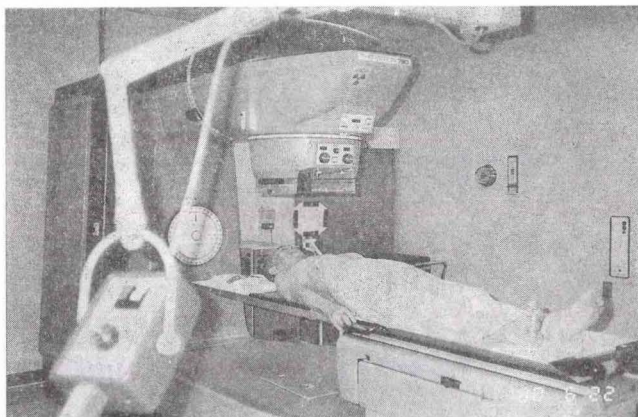
一般に胸部疾患の種類は多く、呼吸器系を中心とした疾患の種類だけでも数百に及ぶが、個々の疾患の間に密接な関連性があることもまたその特徴の一つである。即ち、病因、病態の因果関係の面からも、診断・治療の面からも個々の疾患の研究方法に共通点が多いため、研究方法が高度かつ複雑化した現代においては、研究を1ヶ所にまとめて総合的に行うことが、胸部疾患の研究を向上させるためには必要である。われわれが現在研究対象としている疾患は結核を含む肺感染症の他に、慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息、塵肺、過敏性肺臓炎、サルコイドーシス、肺線維症、肺癌など多数の疾患があり、これらの疾患の発症機序、



診断方法及び治療法について研究するとともに、高度の肺機能検査や肺移植、あるいは人工肺の開発についても研究を行っている。

しかしながら、現実呼吸器疾患研究の幅と深さが益々拡大を要求されているにも拘らず、研究要員の増加が極めて困難な状況であったため、本研究の将来を展望し、これに対処するためには、原則として現定数による改組を行い、共同研究を行い易い体制に改組することが必要と考えられた。即ち、今回の改組の目的は、一つの研究テーマについて、それぞれの異なった知識と技術を有する研究者が、身近にあって、共同的、協調的に研究を行い易くすることであり、このためには、従来部門単位で比較的個々別々に行われていた研究者を再編成して、大枠での研究ブロックに集める研究体制に改める必要があった。このような理由から、今回環境生態学部門、生体防御部門、生体調節・再建学部門、細胞調節学部門の4大研究部門に改組したわけである。

今回の改組によって、従来に比して研究範囲が拡大した。即ち従来のように呼吸器に起った疾患を患者の側から研究するばかりでなく、患者のみならず人間の生活環境について、いわゆる外界の環境についても、呼吸器疾患の原因を探求しようとする環境呼吸器病学や、前述したようにヒトの老化と密接な関連を有する肺の老化の原因を調べ



コバルト60による放射線治療

る老化生物学のように、重要と分かっているけれども従来の研究体制の下では実施できなかった新しい研究を行うことができるようになった。

国際的にみても、わが国の医学研究は、どちらかといえば古い医学教育体制の基盤の上に立って行われて来たのが実状であるため、現在の先進諸国にみられる新しい研究テーマに対応した弾力的な研究組織の運用に比して、旧態依然とした感がなくもなかった。われわれは今回の改組によって、呼吸器系の研究組織としてはかなり釣合のとれた、国際的にも対応できる研究体制を作ろうと努力しているので、英国の Cardiothoracic Institute や米国 NIH 研究所に負けない立派な胸部疾患の研究所ができるものと期待している。

(胸部疾患研究所)

保健コーナー

夏と皮膚科疾患

今年もいよいよ皮膚科医が最も多忙を極める夏がやってきた。患者数は冬の2倍以上にもなり、夏型の皮膚病が爆発的に流行する。当保健診療所においても、この季節には患者数が増加する。夏に皮膚病が多くなる原因は、1) 日光光線が強い

進によって、3) 夏に大量に発生する虫などによって、生じるものに大別される。夏に多く見られる皮膚科疾患としては、水虫、蕁風(くろなまず)、あせも、あせものより、とびひ、虫刺され、日焼け等多数有るが、ここではとりわけ頻度が高く、読者にも馴染みのふかいものをいくつか取り上げて説明を加えた。

1. 日光皮膚炎 いわゆる日焼けである。海水浴、日光浴など多量の紫外線を浴びた数時間後か

ら紅斑が出現し、重症の場合には水疱、びらんをともなう。また灼熱感、疼痛、少し遅れて掻痒感も出現する。誰でも一度ぐらいいはこれを経験しているであろうが、年余にわたって繰り返していると皮膚の老化を促進することになる。この病気を防ぐには、やはり日焼け止めクリームが一番であろう。日焼け止めクリームは水にはいるととれてしまうので、水から出るときにまめに塗る必要がある。また日焼け止めクリームには、紫外線をカットする性能を示す数値（SPF）が書いてあるのでなるべく SPF の高いものを使うほうが良い。治療は皮膚を冷やすことが肝心であるが、その後は勝手に外用剤を使ったりするとかえって病変を悪化させたり後の治療の妨げになったりするの、まず一度皮膚科医に相談するのがよい。

2. 足白癬（水虫） 水虫は夏の皮膚病の代表格であろう。読者の中にも水虫に悩まされているかたは多いと思う。水虫は、真菌の一種である皮膚糸状菌（*Trichophyton interdigitale*, *Trichophyton rubrum* など）の感染によって生じる。夏の高温多湿な気候及びそれに伴う発汗亢進はこの真菌感染にまことに好都合といえる。また一日中靴をはいていなければならぬ成年男子にこの病気は多いようである。この病気の症状は多彩で、小水疱、膿疱、発赤、浸軟、びらんなどが生じたり、逆に皮膚が硬く厚くなったり、カサカサになったりもする。これらの症状が、夏の間はなばなく出現し、冬の間はなんとなくおさまっていて治ったのではないかと考えていると次の夏にまたでてくるといのが、どうやら大多数の人々の典型的な経過のようである。水虫の薬を発明すればノーベル賞だ、などよく言われるが、現在ある薬を使って水虫は十分治癒させる事ができる。ただしまじめに外用をつづけねばという条件つきである。水虫の治療で大多数の人が陥る失敗は、薬

の外用が面倒くさくて続けられないことと、かゆみがなくなることを水虫が治ったのだと勘違いすることのようである。また、水虫は、足に生じる湿疹に症状が非常に似ていることがある。そのため、我々皮膚科医でも視診だけでは判断を下せないことがあるくらいである。まして素人判断は危険であるので、水虫だと思っても勝手に薬を塗らず、まず一度皮膚科医に受診し、その指示に従うことをすすめる。発疹部分の皮膚をこすりとりて顕微鏡でみれば、糸状菌の有無がその場で直ちに分かるので、水虫か湿疹かの判断が容易につく。そして、この二つの疾患では治療が全く異なることを付け加えておく。

3. 虫刺症 虫刺症も夏に非常に多い疾患の一つである。これは、夏には虫が大量に発生すること、野外で活動する機会が増えること、肌の露出部分が増えることなどによる。症状は、虫に刺された部分に一致して、1 mm 程度のものから 10 cm 以上のものまで様々な大きさの紅斑、紅色丘疹が生じる。また、口や眼のまわりを刺されたときはその部分が異常に腫れることがある。そして、よくみると虫の刺した痕も見つけることが出来る。一般的には、虫刺されの皮疹から、虫の種類を見分けるのは困難であるが例外もある。その中で頻度が高いのは毒蛾皮膚炎である。この疾患は、毒蛾の幼虫や成虫にある毒針毛が、庭木いじりなどの際に飛散してきて身体に刺さり、身体の比較的限局された部分に大量の紅色丘疹が生じるのが特徴である。虫刺症の治療はいずれの場合も副腎皮質ホルモンの外用が極めて有効であるので、なるべく早い時期に使用するとよい。

以上とりとめの話になったが、肌の手入れに気を付けてこの夏を乗り切ってください。

（保健診療所 吉岡 晃）

体 育 館 附 設 プ ール の 夏 季 利 用

本学の学生及び教職員は、体育館附設プールを下記により利用できます。

なお、詳細については、学生部厚生課厚生掛（西部構内体育館内、電話 学内 2590）に照会して下さい。

記

期間 7月14日（木）～8月31日（水）

ただし、土曜日及び日曜日は使用できません。

時間 正午から午後2時まで

（注意）

1. 利用に際しては、必ず職員証または学生証を呈示して下さい。
2. 都合により使用をお断りする日があります。

白 馬 山 の 家 の 夏 季 開 設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている白馬山の家を、今夏も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の^{つがいけ}梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山及び避暑などに最適です。

なお、建物は、山小屋風の木造地上2階地下1階建て、間取りは、1階が食堂兼談話室、2階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学白馬山の家

2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あづみ おたり}小谷村大字千^ち国^{くに}柳久保乙 869 の 2

（交通機関）

J R 大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 7月10日（日）～8月20日（土）

4. 所要経費 1人1泊使用料80円、ほかに食費実費程度

5. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内体育館内、電話 学内 2574）に照会してください。

（学生部）

<資 料>

昭和63年度実施の建物等

今年度実施の建物等は次のとおりである。

建 築 施 設 名	延面積	竣工予定 時 期	備 考
化学研究所超高分解 能電子顕微鏡棟	m ² 900	昭和 64. 3. 31	地上4階
病院地区基幹整備	—	64. 3. 31	精神科棟 廻り環境 整備・病 院地区給 水センタ ー改修等

（施設部）

計 報

上尾庄次郎（本学名誉教授・薬学博士）

6月26日逝去、78歳。昭和7年東京帝国大学医学部卒業。35年本学薬学部教授就任、48年退官。その間評議員（38年～39年）、薬学部長（39年～43年、45年～47年）を歴任。45年学士院賞、57年勲二等旭日重光章。専門は薬品製造学。

